

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	句集『広島』の原爆表象の方法：「原爆乙女」「原爆孤児」の句に注目して
Author(s)	樫本, 由貴
Citation	論叢 国語教育学, 16 : 1 - 10
Issue Date	2020-07-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/50702">10.15027/50702</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050702">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050702</a>
Right	
Relation	



## 句集『広島』の原爆表象の方法―「原爆乙女」「原爆孤児」の句に注目して―

樫本 由貴

### 一 問題の所在と研究対象

原爆俳句は、有名俳人の、しかも一句単位の鑑賞レベルでしか読解が蓄積されておらず、地方俳壇の俳人や、俳人ではない人々の句に対しての詳細な論考はほぼ存在しない。しかし、毎年夏を迎えると平和を祈念した俳句大会が開催され、新聞俳壇にも多くの原爆や平和をテーマにした句が投稿される。

このような実作と研究がかみ合わない状況が続けば、第一の問題として、原爆俳句に関する資料の埋没が予想される。それだけではない。第二の問題として、原爆に関連して生み出された言葉は、いまや固定化したイメージを纏っている。その最たる例として、「原爆乙女」や「原爆孤児」が挙げられるだろう。この二つは、多くの人に対して原爆の被害を分かり易く理解させる言葉だ。その一方で、人々が「乙女」や「孤児」という言葉に持っている先入観や物語のイメージは、その立場に置かれている人々の実態を見えにくくする。ゆえに、これらの言葉はジェンダーや社会的な構造の観点から問い直される必要がある。

俳句は、言葉の固定化したイメージを「季語」やキーワードとして重要視する文芸である。言い方を変えれば、俳句は言葉の固定化したイメージによりかかる危険性が、他の文芸よりも高い。なぜなら俳句

は短く、使用した一つ一つの言葉を説明する余白を持たないからだ。

これは、原爆表象でも例外ではない。「原爆乙女」「原爆孤児」は、研究対象とした原爆句集『広島』の句で、端的に原爆の被害の悲惨さを訴えられ、かつ読者の高い共感を得ることのできるモチーフとして題材に選択されている。このような表現においては、実際の「原爆乙女」や「原爆孤児」の姿はイメージの前に掻き消えてしまうこともあった。しかしながら、こうした固定化したイメージを相対化する営みも、既に『広島』の中で実践されていた。

俳句は、原爆を表象した言葉の、固定化したイメージをどのように用いたのか。そして俳句は、固定化したイメージの相対化をどのように試みたのか。本稿はこの二つを示し、俳句における原爆表象の方法の一端を明らかにする。

本稿の研究対象は、原爆投下から十年を記念して編まれた原爆句集『広島』とした。本句集以前にも所謂原爆俳句自体は詠まれていたが、この句集は、同時期に刊行された句集『長崎』と併せて、初めて「原爆俳句」という括りで纏められた刊行物である。

『広島』の発行は一九五五年八月六日。編集は句集広島刊行会、販売取扱店は東京の近藤書店が行った。句集の収録者数は五四五名、句数は一五二一句となっている。配列は五十音順で統一され、個人の

有名・無名の区別、時系列による並び替えはない。また、所属結社の記載もない。投句者数を都道府県別に整理すると、広島が二九九名、次いで東京が三三名であり、広島からの投句者が特出して多い。句には前書きの他、原爆体験記が併記されるものもある。初版の序文は森戸辰男である。

『広島』の編集委員は、配列に五十音順を採用したり、所属結社を記載しなかったりと、俳壇における権力構造を極力排除しよう努めている。一方で、句集の完成度を担保するために、全句掲載を見送る投句者を出している。

紙面の特徴として、『広島』では、原爆投下直後から、原爆にまつわる直接的な被害を詠んだ句が収録句の大半を占めている。「直接的な被害」を讀者に示す最も単純な手立てが、句の中に「ケロイド」「炎」「爆風」などという言葉を用いるほかに、「原爆乙女」「原爆孤児」といった、原爆の被害に遭った人々をカテゴライズし、示すことだったことは想像に難くない。これらの言葉が孕む問題はすでに述べた通りである。

## 二 『広島』に描かれる「原爆乙女」

「原爆乙女」の呼称は一九五二年に谷本清・真杉静枝の呼びかけで集まった、原爆の後遺症に苦しむ若い女性たちを指してマスコミが用いたことに始まる<sup>二</sup>。そして後に、治療のために渡米した二十五人を指す言葉となった。中谷いずみは、この言葉が孕む問題を次のように整理する<sup>三</sup>。

つまり「大和なでしこ」であり「悲劇」の体現者でもある「原爆乙女」は、「怒り」ではなく「許し」によって「戦犯」や「米国」

との橋渡しをする存在として受容されたのである。「中略」<sup>四</sup>「原爆乙女」が記号として流通したのは、日本が戦後の民主開放路線を転換し冷戦下のアメリカのアジア戦略に参加していく時期だった。そのなかで「原爆乙女」という記号は、日米関係の緊密化や戦犯解除など冷戦下の政策を後押ししてしまったのではないか。

「原爆乙女」の呼称は現在、当事者からの訴えを受けて平和祈念資料館の展示からは除かれている<sup>四</sup>。中谷の整理やこうした事例は、原爆表象の現在地点からの見直しが絶えず必要なことを示している。

『広島』における「原爆乙女」の語義は、右に示した「治療のために渡米した」女性に限定されない。そこで、本稿では直接「原爆乙女」の語が句中になくとも、原爆の被害を受けた若い女性という意味に捉えられる句を抄出した（番号は樫本が付した）。

- 1 ケロイドの娘の母として広島忌 磯貝紅村
- 2 ケロイドの乙女よ風がなまぬるし 沖田昌幸
- 3 ケロイドの女の悲哀 陽光にそつといだかれ 北原國雄  
劫火に追はれ市民あまた死せる太田川にて、二句
- 4 枯蓮折れ焦髪浸す乙女のさま 香西照雄
- 5 ヒロシマ忌合唱隊散り少女となる 駒井和を
- 6 髪束になってぬける星座ひしめいて 佐々木猪三美
- 7 春化粧かなし原爆乙女なる 佐々木手綱
- 8 菊挿して原爆乙女書庫を守る 杉原史郎
- 9 ケロイドのモンペ短かき女教師よ 菅田賢治
- 10 寄辺なき女に部屋貸しひろしま忌 辻村澄子

- 11 いまも髪抜けやすく短命かも知れず 戸板幽詩
- 12 洗ふべき髪なく原爆乙女とよばれ 中村静子
- 香川月堂氏を悼む
- 13 時ならぬ木の葉髪とて嘲はれし 鳴澤富女
- 14 夏夜半目なき娘の面つぶやきぬ 邊見邦市
- 15 はるばる東京に来て病院の桜見て原爆娘達 松宮寒骨
- 16 恋秘めてケロイド秘めてセルを着る 山縣虚空

これらの句のうち、句の主体が「原爆乙女」自身ではないと思われる句は、1「ケロイドの娘」を持つ母、5「合唱隊」を見に来た観客、8「書庫」の利用者、10「部屋」を貸す大家など、原爆乙女とかわる様々な立場を詠みこんでいる。

1「ケロイドの娘の母」として広島忌には、「ケロイドの娘の母」が「広島忌」に際しどう思っているのかは書かれない。ゆえに、読む側は当時の時代状況によって構築された「原爆乙女」のイメージからそれぞれが推察するしかない。次のような読みが考えられるだろう。

一つには、米国に渡ることになる二十五人の「原爆乙女」とその「娘」を持つ「母」と読み、米国に娘を送る事への懷疑・手術の危険に対する不安を感じてもよい。二つ目に、治療の機会の与えられなかった娘の「母」と読み、親としての悲しさが書かれているというのも筋として十分に考慮できる。どちらの「母」であっても、一九四五年八月以降の何度目かの被爆の日における述懐であり、原爆の被害が継続して続いていることを示している。

このような語らない句に対しては、右記のように想定される様々な読みの中から、妥当と思われるものを読み手が選択し、それぞれの読解を披露して句を補完することになる。この読みの営みもまた、俳句

創作にとつては俳句そのものを書くことと同様に重要だ。俳句の読みを公に披露する機会を持つのは、多く、選者や結社の実力者といった人物である。彼らの読みは多勢による妥当な、見習うべき読みとして示され、受け取られる。そして書き手は、読み手が示したイメージに依拠しながら再び句を書く。ゆえに、読みによって示されるイデオロギーが、「原爆乙女」の物語を再生産していく側面を持っている。「原爆乙女」という言葉が生れて十年もたない間に、どれほど固定したイメージが浸透しているのか。これを概観することは、読み手と書き手の双方のやり取りによって、あるいは他のメディアからのイメージの影響によって、俳句に用いられる言葉が物語を獲得するプロセスを捉えることを意味する。

だが、『広島』の「原爆乙女」の句の表象が達成した特筆すべき成果はこれだけではない。「原爆乙女」の句の表象において、より重要と思われることに、「原爆乙女」という、そもそも客体化された存在が俳句によっていかに声を獲得し、声をあげたかを示す表象であるということがある。

それを検証する前に、次のような「語るに陥った」、言葉の物語に凭れてしまった句を見ていこう。

例えば7「春化粧かなし原爆乙女なる」は、書き手によって「原爆乙女」の既存のイメージが強化される。「春化粧」をしてもケロイドや脱毛の症状はなくなるならない。「かなし」は、「春化粧」が無意味なほど痛々しい傷を負う原爆乙女を見る書き手の発話である。傷を隠す化粧を「かなし」とし、無意味であるかのよう価値判断することは、「原爆乙女」の存在を象徴化し、消費する行為だと指摘されねばならない。これは「原爆乙女」本人にだけ許される価値判断であるのに、彼女の主体性は奪われ、回復しない。加えて3「ケロイドの女の悲哀

陽光にそつといだかれも同様の指摘ができる。ケロイドを負った「女の悲哀」は「陽光にそつといだかれ」で解消されるのか。「陽光」の中に佇むケロイドの女性は、物言わぬ像のようでもある。太陽に抱かれて神聖さを増すことで、象徴性の付加とともに、彼女は発言の機会を奪われる。

このように、「原爆乙女」の主体性を回復し得ず、あくまで句材として対象化するに留まる句もある。だが、「原爆乙女」を描き、その象徴性によりかかりつつも、ずらしていこうとする試みがなかったわけではない。

8〈菊挿して原爆乙女書庫を守る〉9〈ケロイドのモンペ短かき女教師よ〉は、「原爆乙女」の労働を切り取る。「原爆乙女」と労働の物語の強調は、彼女たちと同じく、原爆の後遺症に苦しみながらも、生きるために働かねばならなかった「原爆乙女」以外の人々を捨象する可能性がある。といつても、この二句は、「原爆乙女の物語」にありがちな健気さを語りはしない。この語らなさによって、書き手は「原爆乙女」の物語によりかかることから距離をとることに成功している。例えば、8の「菊」は菊花紋章を思わせ、「許し」ではなくアイロニーを感じさせると読むこともできる。9の「モンペ短き」は貧困のために丈が合うものを購えないか、実用的な工夫ともとれるだろう。象徴としてではなく、貧困に直面し、原爆の後遺症を抱える中でも働かねばならない「原爆乙女」の困難がほめかされる。この二句は「原爆乙女」の健気さの表象性を拒否する一面を持つ、あるいは、読み手によってそれを発見される可能性を持っているのである。

そして、句の主体が「原爆乙女」自身と思われる句（6、11、12、13）では、「原爆乙女」自身が物言わぬ存在ではなくなり、読み手が付与するイメージを問い直してくる。特に12〈洗ふべき髪なく原爆乙

女とよばれ〉13〈時ならぬ木の葉髪とて嘲はれし〉の二句にその傾向が顕著だ。前句、「乙女」という言葉の、若く美しい未婚の女性というイメージや表象性に立ち返り、「洗ふべき髪」を持たない自分は果して「乙女」かと問う。主体は自分自身を「原爆乙女」と認識していない。主体を「原爆乙女」と呼ぶのはあくまで他者であり、彼女はその呼称に伴う違和感や苦痛を吐露する。主体の問いは、単に脱毛への悲しみを詠うに留まらず、「原爆乙女」の記号を背負わされることへの違和感や苦痛を詠っているとも読める。読み手の持つ規範こそを問う構図だ。加えて、主体が「原爆乙女」自身の句からは、社会に対し正面から意見・反論できない「原爆乙女」に声を与える手段として、俳句が有効だったことが伺える。

13は、前書きから香川月堂なる人物への吊いの一句と分かる。香川は男性と推察できる。「木の葉髪」は冬の季語で、冬、特に髪が抜けることを指すが、この句では「時ならぬ」のであるから、原爆症による脱毛を指す。ここで、読み手は原爆症による「木の葉髪」は、男女どちらにも当てはまる事だと思いがた。差別は女性のみならず、男性にも向けられるのである。勿論、女性本人が差別に声を上げたこととれる一面もあるだろう。しかし、「原爆乙女」と句にないことから、社会がそもそもまなざしを向けなかった立場からの声ともとれるのである。この句は読み手の問題意識を拡大し、差別に晒された人々の連帯を示す。

『広島』における「原爆乙女」の表象には、ケロイドや脱毛、結婚差別といった多様な被害を「原爆乙女」の悲劇的な物語として強化・客体化したり、原爆被害者に広くあてはまる社会的な困難を「原爆乙女」特有のものとして前景化するために、より周縁の人々へまなざしを向けにくくしたりする問題があった。一方で、俳句という創作手段

が当事者に声を与え、創作物としてそうした差別や物語を相対化することを可能にしていたのである。

### 三 『広島』に描かれる「原爆孤児」

原爆孤児とは、その呼称の通り、戦争によって家庭を失った被災孤児の中でも、特にその境遇に原爆が影響している孤児である。高橋由貴は、原爆孤児を次のように整理する<sup>五</sup>。

肉親と自身のよるべき場所が存在している一時的かつ限定的な「迷子」と異なり「孤児（みなしこ）」には、自身を庇護してくれる保護者と安住できる家とともに不在である。そのため、成人被災者が抱える生活困窮などの困難は、子どもの場合、より一層深刻な問題となつてふりかかる。さらに一般的な被災孤児と異なり、原爆孤児の場合は、被爆による健康問題や差別という苦難が追い打ちをかける。（中略＝榎本）

孤児の物語は、二つの話型に分別される傾向を帯びる。描かれる子供のたくましが強調される場合は冒険譚の体裁をとり、彼／彼女が過酷な世の中を力強く生き延びていく姿を描き出す。一方、子どもの見守られるべきか弱さや無垢さが強調される場合は、引き取られた家庭が舞台となり、彼／彼女を取り巻く不和が徐々に解消されていく物語が多い（特に前者は男児、後者は女児といった子供のジェンダーと連動しがちである）。

加えて、原爆の被害に遭った子供たちの手記集、『原爆の子——広島少年少女のうったえ』は、一九五二年に新藤兼人監督で映画化された。このメディアミックスによる影響を、高橋は「戦争の傷が癒えつ

つあった一九五〇年代に、原爆の惨禍がいまなお終わっていない広島の実をまざまざと印象づけた。」と整理する<sup>六</sup>。「孤児」を表現した句群は、映画『原爆の子』から着想を得た映画詠かどうか、判別できないものも含めて三十八句あった。これら全て、孤児を見る側に立つ句であり、自身の視点から詠んだ句は存在しなかった。これは前節「原爆乙女」の句との大きな違いである。なお、基本的に『広島』投句者の性別と年齢は記載されておらず、最年少者だけが分かっている<sup>七</sup>。

三十八句を次に示す。

- |    |                   |         |
|----|-------------------|---------|
| 1  | 原爆忌孤児寄り父母の墓洗ふ     | 飯沼寒街    |
| 2  | 原爆以後駅頭つねに孤児群るゝ    | 榎島沙丘    |
| 3  | 流燈に顔重ねあふ孤児その兄     | 大堀千恵    |
| 4  | 原爆あるな孤児の積木はもう積みぬい | 丘本風彦    |
| 5  | 揺りやまぬ孤児に降る葉と残る葉と  | 香川杜詩夫   |
| 6  | 孤児の原ッば 母の声したたらしいる | 夕焼 北川重彦 |
| 7  | 原爆孤児雲脂落しつゝ日向ぼこ    | 北村正典    |
| 8  | 寒雲の坂の逆行孤児にまみれ     | 河内俊成    |
| 9  | 寒雲の原にてづつと歪む孤児     | 河内俊成    |
| 10 | 流れよる寒雲孤児がひらひらする   | 河内俊成    |
| 11 | 聖母マリア盲目の孤児は地を嗅ぎぬ  | 河内俊成    |
| 12 | 八月六日の孤児相倚るに人語なし   | 河内俊成    |
| 13 | めぐり来て孤児広島の水を飲む    | 河内俊成    |
| 14 | 地の皺に吹かるる孤児の夜が猛る   | 河内俊成    |
| 15 | 死の灰のどこかで原爆孤児が泣けり  | 河内俊成    |
| 16 | 駅の水のむ孤児誰よりも寒くなる   | 佐竹としを   |

ヒロシマにて

- 17 遠景に鮎釣る児佇つまさに孤児  
ヒロシマにて 澤木欣一
- 18 孤児が追ふ家鴨白鳥と化し泛べ  
ヒロシマにて 澤木欣一
- 19 クローバーの球戯も孤児の瑣事ならず  
ヒロシマにて 澤木欣一
- 20 孤児の瑣事見守る吾等鳩出沒  
澤木欣一
- 21 燕とぶ原爆孤児を置き去りに  
眞野美登
- 22 五日市広島戦災児育成所  
孤児といへど躑正しき風邪寝かな  
田中菊坡
- 23 寒灯下孤児打つ牡蠣のかたく閉づ  
田村秀子
- 24 孤児の肩人なき路地に力抜く  
田村秀子
- 25 鳩時計かなし夜学の孤児に鳴く  
田村秀子
- 26 孤児の掌の螢は強く明滅す  
樽馬義數
- 27 天統ぶる向日葵に倚り孤児の唄  
戸板幽詩
- 28 孤児が 月 磨くよ 踊りさわぎの 夜  
中川源雄
- 29 夕焼けて下げ髪ながき原爆孤児  
林屋清次郎
- 30 原爆孤児みんな芋喰ふ歯型つけ  
平川海夫
- 31 孤児尿り城址に不協和音のこす  
藤井舛眉子
- 32 食らふ孤児脚の短き晩夏の卓  
藤野房彦
- 33 似島  
孤児の島木立黒ずむ冬の来ぬ  
藤野房彦
- 34 原爆で親を失くせし子のまなざし  
細見綾子
- 35 ラ・パンセの雨の乳房を仰ぐ孤児  
山本紫花
- 36 汝も原爆孤児か露蹴り新聞配る  
吉田元春
- 37 灼ける焦土に孤児といふ名を噛みしめる  
吉野辰子

38 孤児学園の裏の濠なり鳩鳴く刻 和多野石丈子

このうち、先述の高橋の整理による二つの話型に回収されるものに次のような句が挙げられる。

- 原爆忌孤児寄り父母の墓洗ふ 飯沼寒街  
流燈に顔重ねあふ孤児その兄 大堀千恵  
寒灯下孤児打つ牡蠣のかたく閉づ 田村秀子  
燕とぶ原爆孤児を置き去りに 眞野美登  
汝も原爆孤児か露蹴り新聞配る 吉田元春

これらは、〈原爆忌孤児寄り父母の墓洗ふ〉、〈流燈に顔重ねあふ孤児その兄〉のように、「父母の墓」を「洗ふ」健気さや、「流燈に顔重ねあふ」兄弟に同情する書き手の様子が描かれ、「孤児」の典型的なイメージの補強である。他にも、〈寒灯下孤児打つ牡蠣のかたく閉づ〉、〈汝も原爆孤児か露蹴り新聞配る〉は、孤児の労働という現実を、その描写に徹することで健気さやたくましさや前景にしないように努めてはいるものの、子どもの労働の内実を書けない俳句の短さゆえに、「原爆孤児」のイメージに回収されることも考えられる。

前節と同様だが、大抵が十七音の定型に収まる俳句において、語らないこと以上に書き手が表象への価値判断を遠ざける方法はない。とある表象の象徴性を相対化しようとする際、何句かでまとまった形をとらず、独立した一句でそれを行うなら、書き手自身の文脈を引き込んで読まれることを期待するしかない。だが、『広島』の掲載者の中で、一人「語らない」こととは別の方法で、「原爆孤児の物語」の相対化を試みた人物がいる。

河内俊成は合計十句の連作形式のうち、八句を占める「原爆孤児」の句によって、「原爆孤児」を多様な角度から見ようと試みた。なお、『広島』は一人につき五十句以内の投句数の制限が設けてあるが、これは連作での表現を阻むものではない。河内が発表したのは次の十句である。

寒雲の坂の逆行孤児にまみれ

寒雲の原にてづつと歪む孤児

流れよる寒雲孤児がひらひらする

聖母マリヤ盲目の孤児は地を嗅ぎぬ

八月六日の孤児相倚るに人語なし

めぐり来て孤児広島の水を飲む

地の皺に吹かるる孤児の夜が猛る

枯れゆくは焦土と寡婦の瞳坂なき街

原爆都市の寒暮英語の唄がぼろん

死の灰のどこかで原爆孤児が泣けり

これらの句に前書き・連作タイトルは施されないが、これを連作とみなすのは一貫して孤児が材にされ、有季句の季語が冬に統一されていることが理由だ。連作として受取って不自然ではない。

まず、季語が冬に統一されていることを見る。一般に「夕焼」「晩夏」といった夏の季語は、ヒロシマと強く関連し、また想起させるので『広島』中に散見される。しかし、河内は冬の季語を選択し、夏とヒロシマの接続をずらす。これは、夏以降も続く原爆の被害を読み手に想像させる働きを持つ。この工夫は河内だけでなく、他の作者の原爆孤児の句にも見られる。

では、句の表現を詳細に見る。目を引くのは、「孤児にまみれ」「づつと歪む孤児」「孤児がひらひらする」「盲目の孤児は地を嗅ぎ」「人語なし」など、例えば先述の〈流燈に顔重ねあふ孤児その兄〉とは温度差のある描き方だ。むしろ、孤児への差別的な視線さえ存在すると言える。これは無論、不用意さが招いた表現ではなく、彼が意図的に孤児を突き放す表現を選び、健気さ、か弱さ、同情といった典型的な「原爆孤児の物語」を排し、子供を消費する書き手や読者に対するアンチテーゼとしての描写を試みていることを示す。

例として〈聖母マリヤ盲目の孤児は地を嗅ぎぬ〉と〈八月六日の孤児相倚るに人語なし〉に注目する。前句、「聖母マリヤ」とその前で地に這いつくばる盲目の孤児の対照的な有様は、まさに神の不在を思わせる。これは永井隆が長崎・浦上に投下された原爆について、原爆を神の仕業とした浦上燔祭説<sup>8</sup>への反論にもなり得る上、原爆は「誰が」落としたのかと読者に問いかける形でもある。「聖母マリヤ」は孤児を救わない。孤児に相対するのは、孤児を困難に陥れた、「大人」の一人である主体だけだ。孤児に付属する同情や憐みの物語を用いず、自身と孤児の間の埋められない境を示すことで、かえって河内は孤児に限りなく近づいた描写を行うのである。

〈八月六日の孤児相倚るに人語なし〉の句では、孤児は「人語」を剥奪され、よりはっきりと主体・読み手と孤児の距離が示される。「人語」は単に話し声を指す意味もあるが、「人語なし」と言い切るここでは、「人間の言葉」を想起せざるを得ない。河内はカメラのワンショットのようにこの場面を切り出し、子供が人語を「奪われた」存在だと示す。「相倚る」人語を持たない子供たちは、子供同士だけに通じる言語で喋っている。が、これは恐らく正しい理解ではない。子供同士の会話を聞き取れないのは、彼らが「人語」を持っていないから

ではなく、河内をはじめとする周囲こそが彼らの声を遮断しているからだ。この句の訴えは、「原爆孤児」に「人語なし」と冷徹に差別してきた側への批判である。

このように、河内は一連を通して、「原爆孤児」という存在を物語の中でなく、現実に見出し、見つめ、連作にしている。最終句〈死の灰のどこかで原爆孤児が泣けり〉では、「原爆孤児」が泣くという人間の行為を取り戻している一方で、孤児がいまだに困難の中にあることも示される。その困難とは「死の灰」であり、五五年当時の文脈を引くと、一九四五年八月の出来事だけではなく、第五福竜丸事件までの通時的な放射能被害へのまなざしを含んだ批評をなす。

ところで、「泣く」という安直な動詞の選択をしても、この句が通時的な批評性を獲得し、物語性を退けるのは、連作という手法がそれを可能にしているからだ。例えば〈死の灰のどこかで原爆孤児が泣けり〉の一句だけが提示されれば、読み手は河内が巧みに示した、孤児が人間性を剥奪されていく様子を体験できない。つまり、「ひらひら」と漂い、「地を嗅」ぎ、「人語」を無くし、広島の地に「めぐり来」る孤児を発見できないのである。それどころか、「泣く」という動詞だけを見れば、河内が巧妙に退けたはずの「物語」を句の解釈に用いてしまうかもしれない。原爆という社会的文脈や、連作間の句の関係性ありきでの読解を要請するこれらの句の引用に対しては、そうではない句以上に慎重な姿勢が要求される。

「原爆孤児」の表象にも、「原爆乙女」と同じくただ既存の物語を強化するに留まる句があった。加えて、「乙女」と違い、「原爆孤児」として年齢や立場を制限され、成人を迎えることのない「子供」たちは、短詩型でさえ声を上げられない可能性があることも、『広島』に孤児自身を主体に取る句がないことが示していた。しかし、『広島』の中

には、永遠の客体とも言えるような存在に留まる彼らの表象を転換する試みがあった。その試みは、句として過剰なまでに「孤児」を他者として表現し、境を示すものだった。これらの句は、読み手に「孤児を客体としてみる自身」を意識させ、これまでの読みに用いられてきた「孤児の物語」を拒否することを達成した。だが、河内俊成によるこの試みは、一句独立の読みによって成立するものではなく、連作が作り出す句の間の作用が重要である。ゆえに河内の試みは、後世の現時点に至り、その句を読む姿勢とともに、当時の原爆俳句を引き継いでいく立場としての読み手の姿勢をも問いかけるものとなったのである。

#### 四 総括と今後の課題

本論の目的は、原爆俳句研究、そして社会的な出来事をテーマにして生み出される俳句創作の研究に資するため、「原爆乙女」「原爆孤児」を句材とした俳句について、①この言葉を詠むことそれ自身が孕む問題を指摘しつつ、②当時これらの語を使用して詠まれた句が達成した原爆表象を明らかにすることであった。第二・三節の指摘により、一九五五年当時から、それまで蓄積されていた「原爆乙女」「原爆孤児」の共通イメージを強化するだけでなく、それを相対化しようとする問題意識を持っていた作品を発見出来た。

これらの言葉の持つ共通イメージは、季語とまったく同じ役割をするわけではない。一九五五年、広島に拠点を置く俳句結社の「夕風」に『広島』の書評を寄せた藤野房彦は、「句集広島に於ける無季俳句は原水爆への人間らしい抵抗が、季の役目をしたものであり、そのような、ヒューマニズムを持つことがつまり俳句の社会性である。」と、特に「原爆忌」を季語のように使った無季の俳句について書いている

九。「俳句の社会性」について詳細は述べないが、本論により、これら「ヒューマニズム」、「俳句の社会性」を考えるヒントを得られるだろう。つまり、原爆に関連して生まれた言葉を俳句に用いる時、季語のように固着したイメージに凭れて使うことは有効でなく、むしろ季語と異なり、常に意味合いを問い直すその営みそのものをどう俳句におこしていくかが重要だ。

原爆俳句研究としての今後の課題は、「原爆乙女」「原爆孤児」といった特徴的な語を使う言葉を用いる原爆俳句を検証することに加え、より広範な原爆俳句に対して、原爆表象がどのように営まれてきたのかを読み解いていくことである。

原爆俳句は、原爆という対象を描くための形式として俳句を選択した、ということを示している。俳句によって原爆を描くことは、原爆表象の多様な形式という面だけでなく、俳句形式そのものへ迫っていくことにも示唆的である。本稿では、語の共通イメージ、そして連作という方法の特性を読解したが、それ以外にも、韻律や定型・非定型といった視点が考えられる。今後は、こうした俳句の特性を問い直すために、引き続き社会的な事象を詠んだ俳句について、研究を進めた

## 注

一、二〇〇五年十月二十日、広島地方俳句結社「廻廊」が中心となって復刻版を発行。

二、中谷いずみ「原爆乙女」『原爆』を読む文化事典』二八一頁。

三、同右。

四、同右、二八二頁。

五、高橋由貴「原爆孤児」『原爆』を読む文化事典』二七六頁。

六、同右、二七八頁。

七、本句集の中で最年少は行徳功子、十歳の遺作（蟬鳴くな正信ちゃんを思ひ出す）である。他の投句者の年齢は不明。

八、川口隆行「浦上燔祭説」の歴史と現在」『原爆』を読む文化事典』二二頁。

長崎・浦上地区に投下された原爆の被害と差別に苦しむキリスト教信者に、同じく被爆者の永井隆が説いた「原爆は神による御摂理であり、戦争を終わらせるために必要な恙として浦上の人々が選ばれたのだ」という旨の言葉を指す。この言説は、早くから詩人・山田かんによって批判されたが、一九八〇年代に高橋真司によって批判的に「浦上燔祭説」と名付けられる。

九、藤野房彦「金子兜太の「季の駆使」にふれて―句集「広島」の無季俳句―」『夕風』(夕風社(一九五五・十一)八―九頁)。

十、原爆俳句は、稿中でも触れたように、「原爆俳句」としてまとまったものが句集『広島』『長崎』まで待たなければならなかっただけで、それ以前から原爆を題材にした俳句は書かれていた。また、現在も八月から十月にかけて（これは、投句と掲載の時差による）原爆を題材にした俳句は多く読まれている。このような時間的なスパンの幅や、「原爆乙女」「原爆孤児」といったとある特定の言葉によって「原爆俳句」であることを主張するのはなく、一句全体として「原爆表象」をほめかすような句に対して、今後の考察が重要になる。

## 参考・引用文献

句集広島刊行会編『広島』近藤書店(一九五五・八)

句集長崎刊行委員会編『長崎』平和教育研究会事務局(一九五五・

八)

- 川口隆行『原爆文学という問題領域』創言社（二〇〇八）
- 川口隆行編著『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社（二〇一七）
- 豊田清史『原爆文献誌』郁文社（一九七一）
- 栗林農夫「句集「広島」と「長崎」をよんで……平和と俳句のために  
大きな貢献……」『俳句人』（一九五五・十一）
- 蚤野直根「原爆俳句について」『夕風』（一九五三・四）六・七頁
- 藤野房彦「原爆句集のあり方について」『俳句研究』俳句研究社（一九  
五五・一）一二九―一三〇頁
- 藤野房彦「金子兜太の「季の駆使」にふれて―句集「広島」の無季俳  
句―」『夕風』（夕風社（一九五五・十一）八―九頁

（広島大学大学院博士課程後期一年）